

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 『張文環全集』が出來て思うこと

doi:10.29714/TKJJ.200712.0009

淡江日本論叢, (16), 2007

作者/Author： 會秋桂

頁數/Page： 135-150

出版日期/Publication Date：2007/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200712.0009>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



『張文環全集』が出来て思うこと

會秋桂

要旨

嬉しいことに、陳萬益氏のもとに、多くの優れた台湾文学の若手の研究者が集り、『張文環全集』（2002年、中文版全8冊）と『張文環日本語作品及び草稿全編』（2001年）が台中県立文化中心によって発行された。そのお蔭で、今まで断片しかかき集められない張文環文学の全貌を、全集を辿って読むことによって垣間見ることが出来たのである。1940年代から台湾の文壇で雑誌「台湾文学」を主宰し、御用作家西川満が主宰した「文芸台湾」と対抗した台湾人の日本語作家張文環が華やかに活躍したその背後には、日本語で文学を創作する苦心がありありと見られる。本稿では、台湾人として日本語で文学を創作する困難さと方法を探ることに張文環が苦心した一端を資料の紹介と共に明らかにしたい。

キーワード： 漱石 張文環 全集 日本語の文章表現 日本近代文学

airiti

『張文環全集』が出来て思うこと

曾秋桂

1. はじめに、

2005年に淡江大学日本語学科に共同研究のためにお出でくださった武蔵大学の先生ご一行と座談会をした際に、鳥居邦朗先生に台湾文学研究の基本的な文献に使われる個人作家の全集を集めて、淡江大学ではそれを出す計画をお持ちかと聞かれた。その時、台湾の植民地文学を作品ごとに勉強している会に参加しただけに、そこまで深く考えていなかったことを恥じて、穴があったら入りたい気持ちであった。自分は日本文学の研究で、台湾文学作家の全集を編集する大きな仕事がつきり台湾文学研究者がすべきなことだと思い込んでいたからである。しかし、よく考えてみると、台湾文学の作家の多くは、日本語で沢山創作を残しているし、台湾文学の開拓に役に立つ日本語の分かる年功者が年と共に減っていくこともあり、小さいことながら日本語教育に携わっている自分にも出来るのではないかと、責任感を感じ、思わず気合いが入ってしまった。

嬉しいことに、陳萬益氏のもとに、多くの優れた台湾文学の若手の研究者が集り、『張文環全集』（2002年、中文版全8冊）と『張文環日本語作品及び草稿全編』（2001年）が台中県立文化中心によって発行された。そのお蔭で、今まで断片しかかき集められない張文環文学の全貌を、全集を辿って読むことによって垣間見ることが出来たのである。1940年代から台湾の文壇で雑誌「台湾文学」を主宰し、御用作家西川満が主宰した「文芸台湾」と対抗した台湾人の日本語作家張文環が華やかに活躍したその背後には、日本語で文学を創作する苦心がありありと見られる。本稿では、台湾人として日本語で文学を創作する困難さと方法を探ることに張文環が苦心した一端を資料の紹介と共に明らかにしたい。

2. 張文環が意識した日本語での表現問題

張文環の初期作品を読むと、その日本語の表現能力について、中島利郎は「日

本語の拙さが気になる」¹と指摘している。日本語の文章表現は、台湾出身の張文環を悩ます深刻な問題である。例えば、張文環は、「臺灣文學の將來に就いて」²（1940）では、次のことを述べている。

吾々は先づこのいかに文學すべきかと云ふ問題を考へなければならない。吾々は譬へば、彼女は泣き崩折れて、と云ふ言葉を例に取りあげることが出来る。この言葉はもし内地人であるならば、とにかく吾々よりも素早くこれを掴んでつかふことが出来る。同じ櫻と云ふ言葉でも内地人は吾々より言葉に対する感覚が早い。（中略）その意味で文章の構成上、吾々は實に大變な損をしなければならないのである。それであるから、吾々は文章道に於ては、内地人のやるのを参考にすることが出来るが、しかし真似することが出来ない。（下線部分は筆者による）

張文環は、「泣き崩折れ」と「櫻」の二例を取り上げて、日本語に対する感覚の把握は当然、日本人の方が上で、日本語の文章を書く際、「内地人のやるのを参考にすることが出来るが、しかし真似することが出来ない」と述べている。張文環は、外国語同然の日本語で日本人に近い感覚を持つ文章表現の能力を磨くために、日本語の文章表現を学ぶ手段として「内地人のやるのを参考に」、すなわち内地の作家の作品を取り上げるに値するよう見受けられる。しかし、その後続く「真似することが出来ない」と一緒に考えると、日本語の文章表現受容（内地人が書いた文章を手段として）から文学創作（内地人が書いた作品を真似することに止まらずに、自分の特徴を出すことを目的として）へという二段階に分けて、文学的営為を志向していることが判明した。

また、「文章と生活」³（1938）などの多くの評論では、日本人に対して感じ

¹中島利郎（1997）「張文環作品解説」中島利郎・河原功・下村作太郎・黄英哲編『日本統治期台湾文学台湾人作家作品集第4巻』緑陰書房 P337

²原文は日本語で書かれ、雑誌『台湾芸術』創刊号 1940.3 に発表されたもので、陳万益主編（2001）『張文環日本語作品及び草稿全編』DVD版より引用した。中国語訳『張文環全集第6巻』P46

³原文は日本語で書かれ、雑誌『風月報』第69期 1938.8 に発表されたもので、陳万益主編（2001）『張文環日本語作品及び草稿全編』DVD版より引用した。中国語訳『張文環全集第6巻』P16。「殊に吾々は國文を研究するうへに於て、自ら筆を執り、日常生活をありのままに紙にうつしてみることは、尤も實際的な國文研究の方法であることと思ふのであります。（中略）何故ならば文章を知る本質に於て、その生活と到底離れ得られるものではないと思ふからだ」とある。その他にも、「殊に文學をする本島人は内地人に比べて二倍三倍もこの心算が必要であると思ふのである。先づ言語學的に征服しなければ表現手段といふものをもたないからである」（「獨特なもの存在今

た日本語の文章表現のコンプレックスに張文環はよく触れている。かつて雑誌『風月報』の和文の読者に日本語の文章表現がうまくいかない場合、「閑の折時々筆を持つことである、そして素直な氣持で、自分の生活をありのままに表現することである」⁴と、張文環はそのコンプレックスから逃れる打開策を示唆している。外国語の障壁を乗り越え、その感覚を自分の身体の一部にするように、日本語の文章表現を真剣に模索していた台湾人の日本語作家の張文環の姿は感動的である。その張文環自身が真剣に取り組んだ実践の一つは、内地人が書いた文章を手段として、日本語の文章表現を受容したことである。詳しくは、第3点を見よう。

3. 文学創作に資する日本近代文学の作品群

台湾人の創作で言語的障害を乗り越えるために、張文環は、「文章道に於ては、内地人のやるのを参考に取りあげることが出来る」と考えついた。一体、張文環はどのように「内地人のやるのを参考に取りあげ」たか。『張文環全集』を辿りながら読むと、張文環が参考に取り上げた日本文学の作品を把握することが出来た。日本諸小説から発想を受容したと思われる所を表(一)に整理した。

表(一)に挙げた作品の作家は、夏目漱石、横光利一、尾崎紅葉、樋口一葉、徳富蘆花、谷崎淳一郎である。また、表から張文環が漱石文学をかなり受容していることが判明した。新感覚派の横光利一の『蠅』からの内容が一箇所ある。樋口一葉は、日本では「一葉自身の中にある人間としての願いとかなしみを、作中の人物を介して、個性的、普遍的に生き生きと描き出した」⁵と安定した評価を得ている女流作家である。女性の不運を描こうとした張文環が、同じテーマで優れた作品を書いた一葉に目を向けたことは自然だと言えよう。

次に、日本の作家の作品を受容したと思われる作品の、張文環の小説創作全体における位置付けを見よう。明かな借用あるいは模倣と見られる受容は、『落蕾』、『父の要求』、『豚のお産』、『辣蕒の壺』、『藝姐の家』、『闖鷄』の6篇である。全創作26篇からこの6篇を除くと、他の20篇の小説創作では、表(一)

年は大いにやらう」『台湾新民報』、中国語訳『張文環全集第6巻』P43)と、「我々が臺灣の生活を描くときに一ばん痛感することは、實際生活を文章に持つてくるときの筆者の感覚が、餘りにも内地人とかけ離れて、さう早急に筆が運ばないのである」(「我が文学する心」『興南新聞』中国語訳『張文環全集第6巻』P169)のような発言が見られる。

⁴中文訳「和文讀者に送る」『張文環全集』第7巻 P86

⁵松坂俊夫(1989・初版1982)「樋口一葉の人と作品」『鑑賞日本現代文学2 樋口一葉』角川書店 P32

に挙げたように、明確な受容はあまり見られない。いわば、後期になればなるほど、表現上の受容が見られなくなり、後期は「臺灣の現實を紹介する視點」⁶の意図に基づいてリアリティックに描いた作品ばかりである。また、この6篇の前半の3篇は日本留学中の創作である。日本にいるという地理的条件を考えれば、日本文学に大きく影響されたことも納得が行く。なお、6篇の中で一番数多くの作家の受容が見られる『藝姐の家』では、台湾帰国後、金銭万能の社会において女性の不運や女性の悲鳴を描く際、これと類似した素材をテーマにした日本近代の諸小説から受容したことは、筋が通る。

表(一)日本近代文学から受容した内容

時間	場面	受容先(A)／影響元(B)の具体的な描写
1933年	男同士の恋の相談(明仲と義山／甲野と宗近)	<p>A 彼等二人は時を忘れたやうに、眞に生きて行く力の本質を追及しやうと力んで語合つた。本棚の上の<u>置時計</u>は二人の會話を凝視めていさもうるさいと云つた様な面付だ。『落蕾』別離一</p> <p>B 肩に手を掛けて押す様に石段を上つて、書齋に引き返した甲野さんは無言の儘、扉に似たる佛蘭西窓を左右からどたりと立て切つた。(中略)机の上の<u>置時計</u>がきらきらと鳴る。甲野さんは首を壁に向けた儘、宗近君は腕を拱いた儘、(中略)「藤尾には君の様な人格は解らない。淺墓な跳ね返りものだ。小野に遣つて仕舞ふ」夏目漱石『虞美人草』十七</p>
	女性の不運への歎き	<p>A 彼女は餘計に重い鉛を呑まされたやうな思ひだつた。「……<u>女、女、女はどうしてこうなのでせう。</u>」(中略)「妾の生涯は……妾の生涯は……」『落蕾』別離五</p> <p>B 「あゝ<u>辛い!辛い!最早——最早婦人なんぞに——生れはしませんよ。——苦しい!</u>」眉を攢めて胸を抑へて、浪子は身を悶へつ。徳富蘆花『不如帰』下九</p>

⁶台湾人作家によって書かれた最初の日本語作品集とされた『台湾小説集』(大木書店1943.11)のあとがきに掲げた言葉である。この編集に張文環の意志が関わっていると野間信幸(2000)「解説」河原功監修『日本植民地文学精選集 014』ゆまに書房 P2で見ている。

1937年	生まれた時期と運勢との関係	A 彼は悪い星に生れたことを忘れてみたのだ。 『豚のお産』 B 市蔵の太陽は彼の生れた日から既に曇つてゐるのである。 夏目漱石『彼岸過迄』『松本の話』
1940年	生まれた時期と運勢との関係 「作者」が作品中への登場	A 婆さんの生れの星は人をこきつかふやうに出来てゐるので、(後略)『辣蕪の壺』 B 市蔵の太陽は彼の生れた日から既に曇つてゐるのである。 夏目漱石『彼岸過迄』『松本の話』五 A しかしこゝで作者は云ふ、粉婆さんのやうな女は、或は一種の賣笑的な行為ではないかと思はれるが、それを喜ぶ男は何と解釋すればいゝだらうか。 『辣蕪の壺』 B 作者は小夜子を氣の毒に思ふ如くに小野さんをも氣の毒に思ふ。夏目漱石『虞美人草』九
1941年	類似表現 金銭万能の社会への皮肉 笑いで苦しみを紛	A 楊は蜘蛛の網にかかつた蠅のやうに、胸をかきむしられるやうなこの想念からのがれようとして、自分を罵つたり女の缺點を見出さうとして焦つたりしたが、何も見出すことが出来なかつた。『藝姐の家』一 B 真夏の宿場は空虚であつた。ただ眼が大きな一疋の蠅だけは、薄暗い廐の隅の蜘蛛の網にひつかかると、後肢で網を跳ねつつ暫くぶらぶらと揺れてゐた。 横光利一『蠅』一 A しかし母達はいつも、金だ、金だ、金さへあれば、この世の中の苦痛は何もかも解決されてしまふ。』『藝姐の家』一 B 金、金!知る可し、其の心も金!と貫一は獨り可笑しさに堪へざりき。尾崎紅葉『金色夜叉』中第二章 A 笑ひ出すことは、采雲は小さいとき獨りで泣くと餘計

<p>らそうと する処世 態度</p>	<p>に悲しくなるが、大勢で泣くと面白くてしようがなかつた。母も泣いているからそのために采雲は悲しさを忘れて笑ひたくなつたらしい。(中略)月のある晩、采雲はやはり按摩さんの手を引いて、寂しさうな笛を背中に聞きながら路次から路次を渡り歩いた。『藝姐の家』二</p>
<p>不貞寝</p>	<p>B 又の宿下りは春永、その頃には皆々うち寄つて笑ひたきもの。樋口一葉『大つごもり』上</p> <p>B 今宵は舊暦の十三夜、(中略)お前が口に出さんとて、親も察する弟も察する。涙は各自に分けて泣かうぞ(中略)お父様もお母様もご機嫌よう、此次に笑ふて参ります。樋口一葉『十三夜』上</p>
<p>女としての 不運</p>	<p>A 采雲はしかし母の不貞寝のやうな氣性には時折むかついてくることもあるが、これも男に甘やかされた女の姿だと思へばどうしてようもなかつた。『藝姐の家』三</p> <p>B 「不貞寝をするんだ」彼(健三のこと・論者注)は自分の小言が、歇私的里性の細君に對して、何う反應するかを、よく觀察してやる代りに、(後略)。夏目漱石『道草』三十</p>
<p>女が戸主 になった こと</p>	<p>A かう云つたやうな社會に於て、女は虚榮を忘れない以上は、永遠に解放されないばかりかでなく、絶えず自分一人で悲劇を背負つて歩くことも同じことである。『藝姐の家』四</p> <p>B 何うで幾代もの恨みを背負て出た私なれば、為る丈の事はしなければ、死んでも死なれぬのであらう。樋口一葉『にぎりえ』五</p>
<p>女としての 不運</p>	<p>A いつのまにか采雲は戸主になつてしまつたやうな自由さと不運不運して自分の態度に氣づいたりする時もあった。『藝姐の家』四</p>

<p>女性の悲鳴</p>	<p>B 1888年に一葉が傾いた樋口家の戸主になった。(『樋口一葉事典』おうふう P497)</p>
<p>廻りの同輩と合わず、傲慢な独り者になったこと</p>	<p>A たまたま自分のやうな不幸な人間がそれに出會しただけで、別に誰を恨むわけにもいかなかった。『藝姐の家』四</p>
<p>死の世界への望み</p>	<p>B 力ちやと違つて私しには技倆が無いからね、一人でも逃しては残念さ。私しのやう運の悪るい者には呪も何も聞きはしない。樋口一葉『にぎりえ』一</p>
<p>朝の静ま</p>	<p>A 「不仕合せで、つまらない女の」(中略)死んで了ひたい。采雲は殆ど叢のなかに這入つたやうな所にくるとさう思つた。『藝姐の家』四</p>
	<p>B つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら。これが一生か、一生がこれか、あゝ嫌だ嫌だ。 樋口一葉『にぎりえ』五</p>
	<p>A 采雲は不運のために藝姐と云ふ穴にはまり込んだとたとへるならば後二人(阿鑿と小玉のこと・論者注)はまるで先天的な藝姐らしい藝姐である。采雲の心はますます暗くなつて心までその人達まで嫌悪した。その嫌悪の情がはげしくなると采雲はヒステリックになつて傲慢な女だと云はれてしまつた。『藝姐の家』六</p>
	<p>B お力といふは此家の一枚看板、年は随一若けれども客を呼ぶに妙ありて、さのみは愛想の嬉しがらせを言ふやうにもなく、我がまゝ至極振舞、少し容貌の自慢かと思へば小面が憎くいと陰口いふ朋輩もありけれど、樋口一葉『にぎりえ』一</p>
	<p>A 死んでやるのだ。河には蓋がないと云はれてゐるではないか。(中略)「ほんとに河には蓋がないではないか。」采雲は心でさう呟いてゐた。『藝姐の家』七</p>

	った川の 風景描写	B 行かれる物なら此まゝに、唐天竺の果までも行つて仕舞たい。あゝ嫌だ嫌だ嫌だ、どうしたなら人の聲も聞えない、物の音もしない、静かな、静かな、自分の心も何もぼうつとして、物思ひのない處へ行かれるであらう。 樋口一葉『にごりえ』五
		A 采雲はちつと朝風を孕んでゐる帆掛船を凝視めてみた。『藝姐の家』七
		B 春の夜は、上り下りの河船の櫓聲に明け放れて、朝風を孕んで下る白帆の頂から薄らぎ初める霞の中に、(後略)谷崎潤一郎『刺青』
1942 年	成就した 二人の恋 物語	A 「阿凜さん私(月里のこと・論者注)の絵を描いてください、(中略)」私(阿凜のこと・論者注)のみた貴女はこの繪以上です』『鬨鷄』七
		B 清吉は清浄な人間の皮膚を、自分の戀で彩らうとするのであつた。その刺青こそは彼が生命のすべてであつた。谷崎潤一郎『刺青』

(注) 枠囲いは論者による注目点で、張文環と受容した作品での具体的共通項を示している。

4 『父の要求』と漱石の小説群との間

詳細に読んでみると、『父の要求』には、漱石の作品との共通性がさまざまに見られる。そうした点を捉えて『父の要求』の内容をAとし、漱石の小説群をBとする両者の具体的な受容関係・描写を表(二)に整理した。

表(二)に整理したように、両者が類似していると思われる描写は11項目ある。ここでは、代表的な(一)人物設定、(二)下宿先、(七)結婚祝いを買う場面の三例だけを取り上げて、漱石の小説群からの受容を指摘する。

『父の要求』の語り手の「私」が題名を「坊つちやん」にしようとしたことをわざわざ作品中で断っているところを読むと、明らかに漱石の『坊つちやん』を意識している点が想像されよう。また、同じく「素人下宿」の母娘の所で世話になるという『父の要求』の設定を見ると、漱石の『こゝろ』の設定を小説の舞台と人物設定に使ったことに気づく。これは張文環が東京で下宿している

実体験の一部分である⁷。さらに、『父の要求』では、結ばれない好きな女性賀津子に結婚祝いを買う場面での「時計」と「指輪」という二者択一の葛藤は、漱石の『それから』（1909）にもある。要するに、代助が「指輪」を買った微妙な心理的葛藤をうまく表現した漱石『それから』の醍醐味⁸を張文環が見抜かない限り、『父の要求』では、結ばれない好きな女性賀津子に結婚祝いを買う場面での「時計」と「指輪」という二者択一の葛藤を導入しないであろう。この点において言えば、張文環は漱石の文学が分かった一人である。

表(二)『父の要求』と漱石の小説群との比較

項目	具体的描写 (A:『父の要求』/B:漱石の対応する作品)	
(一) 人物設定	A	私(語り手・論者注)は實を云ふとこの物語りの題目を「坊ちやん」とでもつけたかつたが、「坊ちやん」にしては、金仕ひが餘りに吝々してゐるし、それからと云つて世間を見る目が餘りに邪氣なさすぎて、世の中の苦勞がわからない。
	B	「坊つちやん」は竹を割つた様な氣性だが、只肝癪が強過ぎてそれが心配になる。(中略)「坊つちやん」の手紙はあまり短過ぎて、容子がよくわからないから、此次には責めて此手紙の半分位の長さのを書いてくれ。(中略)御小遣がなくて困るかも知れないから、為替で十圓あげる。——先達で「坊つちやん」からもらつた五十圓を、「坊つちやん」が、東京へ歸つて、うちを持つ時の足しにと思つて、郵便局へ預けて置いたが、此十圓を引いてもまだ四十圓あるから大丈夫だ。『坊つちやん』(七)
(二) 下宿先	A	「素人下宿」(父が家出をしたまま。)
	B	「素人下宿」(父が日清戦争で戦死した。)『こゝろ』下十
(三) 小道具 ①水蜜桃	A	「賀津子さん、僕はこの家とつても氣に入つたけれど、何だかあの刑務所の時計臺が氣に入らないのだ。」と「水蜜桃」を持つてきた賀津子をつかまへて、柄にもならぬ感傷的なことを言つて、後で後悔した。

⁷同前掲野間信幸 1994 年論文 P53

⁸これに関する詳論は、曾秋桂(2002・初出 2001)「漱石の描く男女関係の記号論的世界——『それから』の「指輪」と「時計」」『夏目漱石試論——漢詩的東洋と小説的西洋の相克』致良出版社 P306-307 を参照。

	B	髭のある人(名は広田先生・論者注)は入れ換つて、窓から首を出して、 <u>水蜜桃</u> を買つてゐる。やがて二人の間に果物を置いて、「食べませんか」と云つた。三四郎は禮を云つて一つ食べた。二人が水蜜桃を食べてゐるうちに大分親密になつて色々話を始めた。『三四郎』一
(四) 小道具 ②大学の図書館	A	この頃阿義は學校がないから毎日 <u>大學の圖書館</u> へ通つてゐた。
	B	ある日私は久し振りに <u>學校の圖書館</u> に入りました。(中略)御承知の通り圖書館では他人の一の邪魔になるやうな大きな聲で話をする譯に行かないのですから、Kの此所作は誰でも普通の事なのですが、私は時に限つて一種變な心持がしました。『こころ』下四十
(五) 小道具 ③生け花	A	①阿貴が訪ねてきたのは丁度賀津子が竹筒に <u>花を生けてゐる</u> ときであつた。 ②三人は近所のしるこ屋から取り寄せた蜜津豆を食べ乍ら賀津子の <u>生花</u> の話をしてゐた。
	B	今いつた琴と <u>活花</u> を見たので、急に勇氣がなくなつて仕舞ひました。後から聞いて始めて此花が私に對する御馳走に活けられたのだといふ事を知つた時、私は心のうちで苦笑しました。『こころ』下十一
(六) 小道具 ④樂器	A	この八畳は下の娘の賀津子さんの <u>ピアノ</u> が置いてある。(中略)彼女がピアノを引く時間は一定してゐる。
	B	私は自分の居間で机の上に頬杖を突きながら、 <u>其琴</u> の音を聞いてゐました。私には <u>其琴</u> が上手なのか下手なのか能く解らないのです。けれども餘り込み入つた手を弾かない所を見ると、上手なのぢやなからうと考へました。『こころ』下十一

<p>(七) 小道具 ⑤好きな女性にあげる結婚お祝い(指輪/時計)</p>	<p>A 賀津子に何か御祝の物を買ってあげたいとおばさんに訊いたら、おばさんは堅くそれを辞してゐた。(中略)三人は伴れ立って新宿デパート廻りをしたが、(中略)時計の部へ来ると賀津子はしきりにカマボコの指輪がほしさうなことを云つてゐた。しかしそれを買ふのは陳は好まなかつた。婚約指輪があるのに。(中略)「二つが面倒なら一つ僕にくれ。」「さうしなさい。」とおばさんがすゝめた。と云ふのは賀津子はいつか時計を買ひたいと言つたことがあるからだ。</p>
<p>B 代助は眞珠の指輪を此女に贈ものにする時、平岡は此時計を妻に買って遣つたのである。代助は、一つ店で別々の品物を買つた後、平岡と連れ立って其所の敷居を跨ぎながら互に顔を見合せて笑つた事を記憶してゐる。 『それから』(四)</p>	
<p>(八) 共通語の神経衰弱</p>	<p>A とにかく老人といふものは若者が神経衰弱に罹るのは、睡眠不足ばかりするからかゝるもので、これさへなければ神経衰弱にかゝるやうなことは絶対にないとかう一途に考へてゐるものだから、世の中の様々なことがあつてそれが自然と神経にも影響して神経衰弱にかゝることもあると説いてきかせても無駄だと阿義は思つてゐた。結婚さへしてしまへば神経衰弱にかゝるやうなことは絶対にないと言ふのが昔の人の持論である。</p> <p>B ①Kはただ學問が自分の目的ではないと主張するのです。意志の力を養つて強い人になるのが自分の考だと云ふのです。それに成るべく窮屈な境遇にゐなくてはならないと結論するのです。普通の人から見れば、丸で酔興です。其上窮屈な境遇にゐる彼の意志は、ちつとも強くなつてゐないのです。彼は寧ろ神経衰弱に罹つてゐる位なのです。『こころ』下二十二</p> <p>②Kの神経衰弱は此時もう大分可くなつてゐたらしいのです。『こころ』下二十七</p>

(九) 三人で 買い物 と食事 をする 場面	A	賀津子に何か御祝の物を買ってあげたいとおばさんに訊いたら、おばさんは堅くそれを辞してゐた。(中略)三人(女親子と阿義・論者注)は伴れ立って新宿デパート廻りをしたが、(中略)二人は「買物」が終るとデパートで「晩食」を取って、武蔵野館に入つて映畫ものを見たが、一番嬉しい晩であつたと陳が云つてゐた。
	B	三人(女親子と「先生」・論者注)は日本橋へ行つて「買ひたいものを買ひました」。(中略)斯んな事で時間が掛つて歸りは「夕飯」の時刻になりました。奥さんは私に對する御禮に何か「御馳走する」と云つて、木原店といふ寄席のある狭い横丁へ私を連れ込みました。『こころ』下十七
(十) 三角関 係にお かれた 男の嫉 妬	A	①賀津子の「目録」が今も尚彼の目の前でちらつてゐる。一體あの女はいつ頃「結婚する」のだらう。 ②「賀津子さんの「御結婚式」はいつ頃になりませう」(中略)「きかなければよかつたと少しほてほて来る思ひがしたが、まさか一句も賀津子のことを訊かないと却つて悪いのかも知んない、と思つたかに遂聞いて見たが、やつぱりきかなければよかつたとはかには後悔し出した。しかし禮儀上きいた方がよいのかも知れない。何れにしても彼女の結婚を見ずに臺灣へかへつて靜養しようと考えた。

	<p>B</p> <p>①一週間ばかりして私は又 K と御嬢さんが一所に話して る室を通り抜けました。その時御嬢さんは私の顔を見るや 否や笑ひ出しました。(中略)今から回顧すると、私の K に對 する嫉妬は其時にもう充分萌してゐたのです。『こゝろ』下 二十七</p> <p>②彼の重々しい口から、彼の御嬢さんに對する切ない戀を打 ち明けられた時の私を想像して見てください。私は彼の魔法 棒のために一度に化石されたやうなものです。(中略)すぐ失 策つたと思ひました。先を越されたなあと思ひました。『こゝ ろ』三十六</p> <p>③K から聞かされた打ち明け話を、奥さんに傳へる氣のなか つた私は、「いゝえ」といつてしまつた後で、すぐ自分の嘘 を快からず感じました。(中略)私は突然「奥さん、御嬢さん を私に下さい」と云ひました。『こゝろ』四十五</p>
<p>(十一) 故郷に 歸つた 気分</p>	<p>A</p> <p>僕が二三年しか見えなかつた故郷はこんなに迄變つてしま つた。田舎の癖に随分神経質に見えてきたよ。子供まで駄し やれを云ふからおどろいた。僕的生活は毎日書物を讀む以外 に何もする事がない。最初は毎日父と母に世間話を聞かせた りし(中略)毎日手持無沙汰ばかりしてゐるやうな氣持です。 人間は静寂と單調に迫められると却つて騒々しい處よりも 落付かず、何を讀むのにも頭を打ち込むことができない。毎 日こんな静かな田舎でそはそはしてゐるのが學生の仕事か と思ふと情なくなります。</p>

B	<p>①私は退屈な父の相手としてよく將碁盤に向つた。(中略) 此隠居じみた娯樂が私にも相當の興味を與へたが、少し時日 が經つに伴れて、若い私の氣力は其位な刺戟で満足出來なく なつた。(中略)早く東京へ歸りたくなつた。『こゝろ』上二 十三</p> <p>②私は出来るだけ父を慰さめて、自分の机を置いてあるところへ歸つた。私は取り散らした書物の間に坐つて、心細さうな父の態度と言葉とを、幾度か繰り返し眺めた。私の哀愁は此夏歸省した以後次第に情調を變へて來た。(中略)私は母に日を見て貰つて、東京へ立つ日取を極めた。 『こゝろ』中八</p>
---	--

表(二)に整理した 11 もある類似項目が『父の要求』に見られるのは、単なる「偶然の一致」とは言えない。ここからは、明白に近代文学の形成者とも言える漱石文学の面白さ、素晴らしさを張文環が意識しながら、それを吸収して文学創作に臨もうとする姿勢が窺えると言えよう。前節で見たように、近代日本文学の受容で共感をキーワードにしていた張文環は漱石文学の中に多くの共感を見出し、積極的にその小説を学ぼうとしていたことが『父の要求』から明らかになるのである。

5. 張文環が日本近代文学から受容した真意

以上見てきたように、日本近代文学から多く受容したからといって、張文環文学の価値が半減するわけではない。逆に、異国文学の受容と影響を消化し、張文環が自国の風土に最も合う文学を創り出す難業を遂げ、日本語の文章表現に払った苦心を高く評価するべきである。

2000年に前衛出版社によって、林瑞明編『頼和全集』全5冊が出版されたことにひき続き、2006年に国家台湾文學籌備處出版によって、陳万益主編『龍瑛宗全集』全8巻が出版された。台湾文学者の全集が盛んに編集されている中、基本的な研究文献に取り組む台湾文学の若手研究者が大いに活躍するよう期待している。

テキスト

- (1975・初版 1967)『漱石全集』第2巻～第6巻 岩波書店
(1970)『日本近文学大系 8 樋口一葉集』 筑摩書房
(1971)『日本近文学大系 5 尾崎紅葉集』 筑摩書店
(1988・初版 1971)『日本近文学大系 30 谷崎潤一郎集』 筑摩書房
(1972)『日本近文学大系 9 北村透谷徳富蘆花集』 筑摩書房
陳万益主編(2001)『張文環日本語作品及び草稿全編』DVD版
台中県立文化中心
陳万益主編(2002)『張文環全集』全8巻台中県立文化中心

参考文献(日本語／中国語・年代順)

- 松坂俊夫(1989・初版 1982)『鑑賞日本近代文学 2 樋口一葉』 角川書店
中島利郎・河原功・下村作太郎・黄英哲編(1999)『日本統治期台湾文学台湾人作家作品集第4巻』緑陰書房
葉石濤著中島利郎・澤井律之訳(2000)『台湾文学史』 研文出版
河原功監修(2000)『日本植民地文学精選集 014』ゆまに書房
張良澤(2001)「張文環的「父の顔」」『台灣文學評論第1巻第2期』
真理大学台湾文学資料館
橋爪紳也主編(2003)『アジア都市文化学の可能性』清文堂
(2004)『文芸春秋特別版漱石と明治日本』文芸春秋
曾秋桂(2004)『漱石文学の探究——新たな作品論への試み』致良出版社
(1994・初版 1991)『台湾作家全集・短篇小説巻／日據時代⑩張文環集』前衛出版社
龔鵬程編(1995)『台灣的社會與文學』東大圖書公司
張炎憲・翁佳音編(2000)『陋巷清士：王詩琅選集』稻鄉
柳書琴編(2002)「張文環生平寫作年表」陳万益主編『張文環全集第8巻』台中
県立文化中心
尾崎秀樹著陸平舟・間ふさ子共訳(2004)『舊殖民地文学的研究』人間出版社